

SHOW HEYシネマルーム

<h2>ボローニャの夕暮れ</h2>	
2008年・イタリア映画 配給 / アルシネテラン 104分	
2010 (平成 22) 年 8 月 7 日鑑賞	テアトル梅田

Data

監督・脚本・原案：プービ・アヴァーティ
出演：シルヴィオ・オルランド / アルバ・ロルヴァケル / フランチェスカ・ネリ / エツィオ・グレッジョ / ヴアレリア・ビレロ

👁️👁️ みどころ

邦題では、何の映画がよくわからないが、「ジョヴァンナのパパ」という原題ならバッチリ！戦争前夜、学校内でクラスメイトの殺人事件が発生。その犯人は何と、わが最愛の一人娘。そんなバカな！娘はなぜ？美しい妻と、少しオケテの娘の間で揺れ動く、小太りの冴えない中年男の心がいじらしい。

それにしても、クールで美しい母親のこの対応は一体なに？父親には容易に見えない娘と母親の確執とは？そして、最後に訪れる意外な結末を、あなたは どう解釈・・・？

* * * * *

本作は何の映画？

ボローニャはイタリアの町だから、本作はイタリア映画。そして時代は、ムッソリーニのファシズムが台頭しようとしている不穏な時代。そこで描かれるのは、美術教師の父親ミケーレ・カサーリ（シルヴィオ・オルランド）と、美しい母親デリア（フランチェスカ・ネリ）、そして17歳の一人娘ジョヴァンナ（アルバ・ロルヴァケル）の家族の物語。

そう聞くと、まず思い浮かぶイメージは感動もの。しかし、ミケーレが勤務しジョヴァンナも通っている高校内で、ジョヴァンナのクラスメイトであるマルチェッラ・トラクスレル（ヴァレリア・ビレロ）が殺されるという事件が起きたから、本作は意外とサスペンスもの？

目立つアンバランス性がストーリーの軸に？

この殺人事件勃発までのストーリー展開の中で目立つのが、いくつかのアンバランス性。

その第1は、妻のデリアがやけに背が高く、少しすましたような美女であるのに対し、夫のミケーレは、背が低く小太りで風采のあがない男だということ。こんなべっぴんの女がなぜこんな男と？

第2は、17歳という思春期にあるジョヴァンナが、なぜか男と口も聞けない内気な娘らしいこと。また、父親のミケーレがそれをさかんに気にしているにもかかわらず、妻のデリアはそのことに全然興味を示していないこと。この年頃の娘はどちらかという父親との断絶はあっても、母親とは仲がいいのでは？第3は、家族ぐるみのつき合いをしている隣人の警察官のセルジョ・ギア（エツィオ・グレッジョ）が、えらく背が高くカッコいい男であること。ミケーレと比較すると、それが一層目立つから、こんな場合、ひょっとして不倫騒動に発展する恐れも？

カメラは、父と娘の語りを通して、ジョヴァンナが美しいドレスを着て、クラスメイトであるマルチェッラの誕生日パーティーに出席する姿を淡々と追っていく。ところがその翌日、その彼女が学校で死体となって発見されたから大変。セルジョの調べによると、マルチェッラの衣服には精液がついていたというから、犯人はきっと男。一瞬ジョヴァンナがヤバイのではと、ミケーレは心配したが、それを聞いてひと安心。ところが…？

本作は、一体どんなストーリーに展開していくの？冒頭の展開を見ている、それが全く見えてこない。それが本作の面白さの1つだが、ひょっとして前述のアンバランス性がストーリーの軸に？

イタリアの裁判は？17歳は未成年？判決は？

日本では、2009年8月3日に実施された第1号の裁判員裁判から1年が経過し、その総括がなされているが、第二次世界大戦直前のイタリアの刑事裁判は？

日本でも、戦前の刑事裁判は、戦後導入されたアメリカ式の当事者主義にもとづく裁判とは全く違うスタイルだったが、イタリアでもそれは同じようだ。また、17歳のジョヴァンナは未成年？それとも成年？それらの点についてぜひ興味深く観察してほしい。それにしても、被告人が法廷内のオリのような設備の中に入れられている姿を見ると、かなり異様に思えるはずだ。

ジョヴァンナの弁護人となった弁護士が選んだのは、ジョヴァンナには刑事責任能力がなかったとして無罪を主張し、その結果、精神病院に収容されるのは、仕方なしという戦術。当初、ジョヴァンナがそんな戦術に抵抗を覚えたのは当然だが、「有罪になるよりはよほどまし」と説得されると…。

この母親とこの娘はなぜ？男には理解不可能？

娘が学校で人気ナンバー1の若者と仲良くなれそうなことに気をよくした父親ミケーレだが、そこで教師の特権をひけらかせたのはいかげなもの？もっとも、それも内気な娘を

心配する父親心だと考えれば、少しはほほえましい。ところが、母親のデリアは、ミケーレがそんな風に動くことになぜか猛反発。人気ナンバー1の男子学生が、さえないジョヴァンナなどに興味を示すはずがないというのがデリアの主張だが、それはちょっと冷たすぎるのでは？

ならばデリアはジョヴァンナに対して愛情を持っていないのかということ、そうではないらしいが、ジョヴァンナの裁判中も、精神病院に収容されてからも、デリアが全然ジョヴァンナに面会しようとししないのは一体なぜ？デリアとは逆に足しげく精神病院に通っているミケーレは、戦争が激化し、家から精神病院までのバスの便が確保できなくなると、自分だけ精神病院の近くに移り住む決意を固めたほどなのに…。もっとも、あの事件のせいで教師をクビにされたミケーレがジョヴァンナの世話を焼くことに集中できたのは、セルジョの世話によってデリアがある仕事に就くことができたため。もともと美男美女のセルジョとデリアは仲が良さそうだし、ある日の爆撃によってセルジョの家族は死んでしまったから、ミケーレが精神病院の近くに引越すと、ひょっとしてセルジョとデリアの間に何か起きるのでは？ある日ミケーレが医師がら聞かされた話によると、ジョヴァンナは無意識のうちに美しい母親と自分を比べて劣等感を抱いており、母親が父親とは違う男に恋をしていると思い込んでいるらしい。すると、その男とはひょっとして…？

なるほど、この母親とこの娘間のなんとなく白々しい関係はそこに原因があったの？しかし、そんな微妙な女同士の関係はミケーレや私のような男にはとても理解不可能…？

男には理解しづらい点も・・・

本作の主人公は男のミケーレだから、殺人事件の発生とその後の展開の中で、ミケーレがジョヴァンナに対して示す気持とその行動は理解しやすい。それに対して男の私が理解しづらいのは、一貫して何を考えているのかよくわからない母親のデリアの行動と、いつもデリアのことを気にかけているジョヴァンナの気持。とりわけ、ジョヴァンナがデリアの手袋に固執し、ミケーレが持ってきてくれた黒い手袋をつけてはしゃぐ姿は理解困難だ。

本作のハイライトの1つは、ミケーレが精神病院の近くに引越していくに際して、セルジョに対してデリアと一緒にいってほしいと語りかけるシーン。それを聞いて、「それじゃ、お言葉に甘えてそうさせていただきます」となるわけではないだろうが、ここまでミケーレの気持を見せられると、さすがに少し切ない気持ち。

容易に展開が読めないまま、意外なラストへ

他方、ミケーレやジョヴァンナの気持の揺れとは別に、ムッソリーニの失脚、イタリアの降伏と、時代は進行していく。そんな中、ファシスト党を支持していたセルジョの運命は？ここらのシーンは、カリス・ファン・ハウテン主演の『ブラックブック』(06年)や、モニカ・ベルッチ主演の『マレーナ』(00年)で見たシーンを彷彿とさせるが、戦争中に

どちらの立場を支持していたかによって、戦後、立場が天国と地獄に逆転するのは世の常だ。もっとも、政治的にはどちらの側にもついていなかったミケーレにとって、それはどうでもいいこと。戦後、ミケーレは退院してきたジョヴァンナと2人で仲良く暮らしていたが、さてデリアは一体どうなったの？

戦後の混乱期中、セルジョが処刑される姿を遠くから平然と見守るデリアの姿が少し登場するが、それを見ているとなおさらデリアの心理や行動がわからなくなってしまう。そして、ラスト近くになって、ある映画館の中でデリアと再会したミケーレとジョヴァンナが見たものとは？さらに、ストーリーの展開が容易に読めないまま訪れてくる、意外なラストとは？さて、あなたは本作の良さを十分楽しむことができたかな・・・？

断然、邦題より原題のほうが！

本作は新聞紙評でもかなり高い評価を得ていたが、「ポーニヤの夕暮れ」という邦題はいかにも漠然としており、何をテーマとした映画かよくわからない。それに対して、本作の原題は「ジョヴァンナのパパ」。これなら一人娘のジョヴァンナを思い続ける父親ミケーレの姿を描いたものというイメージがはっきり浮かんでくる。したがって、私的には、邦題よりも原題のほうが断然ベター。

本作はイタリアのあの時代のある家族を描いた小さな映画だが、イタリアでは大ヒットし、シルヴィオ・オルランドは、第65回ベネチア国際映画祭で主演男優賞を受賞したとのこと。しかし、私が観たときの映画館の観客の入りは寂しい限りだった。こりゃ、『ポーニヤの夕暮れ』という邦題のつけ方が少しまずかったのでは・・・？

2010(平成22)年8月10日記

宍道湖・嫁ヶ島の夕暮れは？

『ポーニヤの夕暮れ』は、スリルとサスペンスにとんだ映画だったが、私がある事件で弁護士として通っている島根県松江市の観光名所の1つが宍道湖・嫁ヶ島の夕暮れ。日曜日の朝から水郷めぐりや松江城の見学で歩き回った私は、夕方宍道湖・嫁ヶ島に沈む夕日をカメラに収めるべく待機する多くの人たちと共に絶好のポジション取りを。その成果が右の写真だ。こりゃ、プロの撮影によるパンフレット掲載の写真とほとんど同

じ。私はそう自画自賛しているが、さて、あなたの評価は？



2010(平成22)年10月28日記